

---

# エンゲージ

藍村 泰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンゲージ

### 【Nコード】

N1964K

### 【作者名】

藍村 泰

### 【あらすじ】

「警察が使う手錠よりも強固に人を縛ることが出来る方法を、ボクはあの時悟った」  
一体何を意図して、小さな殺人犯が語ったのか、刑事にはわからなかった。

義理の母を殺しました。

急に、頭の中が空っぽになった気がしたら、次の瞬間、手には包丁を持っていました。ボクは迷わずそれを彼女に突き刺したのです。動機？ …… ご周知のとおり、女はボクに対し、幼い頃から性的虐待・暴行を繰り返してきました。背中にある火傷跡など、一生消えないでしょうね。

兎に角、憎かった。女が風呂に入る度、溺れ死んでしまえばいい。料理をする度、誤って自分の手首を切り落としてしまえばいいと思っていました。

幼なじみの賀代<sup>かよ</sup>を傷付けたことには深く反省しています。目撃されてしまい、動揺してしまったのです。——彼女の傷は、大丈夫なんでしょうか？

真摯<sup>しんし</sup>な瞳で訊いてくる、理知聡明そのものの少年と相対して、事情聴取に当たった刑事は当惑していた。

孫田涼<sup>まことりょう</sup>の義母の死体は、それはもう目も当てられぬ状態で発見された。涼は既に死亡している義母の胸部を、現場へ踏み込んだ警官達に取り押さえるまで刺し続けていた。

アイボリー調の小綺麗な部屋の壁に散った血は多量だったと彼らは報告してきた。義母の頭蓋骨が砕けていたことから、おそらく抵抗しなくなるまで何度も壁に打ち付けたのだろう。

義母の死因は、出血性ショック死だった。

第一発見者は、孫田涼の幼なじみでマンションの隣に住む、里岡<sup>りおか</sup>賀代<sup>かかよ</sup>。悲鳴を聞きつけ、鍵のかかっていなかった孫田家へ入ったらしい。そこで死体発見。涼は現場処理のためか、部屋を一旦開けており、里岡賀代は警察へ通報したという。

戻ってきた孫田涼によって里岡賀代も全身を刺され、昏睡状態に

おちい  
陥る。

今年中学二年生——まだ十三歳の年端もいかなない少年の凶行に、世間は様々な見解を寄せる。ある者は同情の念を示しながらも非難し、またある者は年頃の少年少女が秘める心の闇にスポットライトを当てた。親と子（はたまた社会）どちらが悪いのか、評論家達はこぞつて弁舌を繰り広げた。

——またか。

一般人からしてみると、そう思うに禁じ得ない事件のあらましである。長年暴力を振るわれてきた子供が、ついに親を殺す。

だがしかし、事件の当事者からすると、これは第三者の視点より見れる事柄ではない。

第一発見者である里岡賀代など、死体を発見したばかりに、信頼していた幼なじみに切りかかれたのだ。心の傷は相当深いに違いない。

涼の父親は警察からの一切の連絡を拒否し続けている。

「刑事さん？」

微細ながら怒りを内包させて、少年は眉根を寄せた。先程問われた里岡賀代の安否を伝えず、黙りこくっていたからだろう。

週刊雑誌には、少年Aと記載されている孫田涼は、端麗な面立ちを歪めて指を体の前で組んだ。二人を照らす、蛍光灯の明かりがちらつく。

ブラインドを閉めた窓が忙しくガタガタと揺れている。何と立て付けが悪いことかと警官は内心舌打ちした。昨日から、近年稀に見る豪雨がここら一帯を襲っていた。

「賀代さんは無事だよ。搬送先の病院で手当を受けている」

教えると、孫田涼は安堵した表情を見せる。柔らかいそれは、殺人を犯した人間には思えないくらい無垢だった。

「……賀代……」

酷く掠れた声が何度もリフレインする。稲光を背にして、賀代を呆然と見つめる少年を、彼女も呆然と見つめた。

しばし無言であつた二人のうち、最初に動いたのは孫田涼だつた。玄関先でローファーを脱ぎ捨てて賀代の目の前で横たわっている彼の義母の前で膝をついた。

「——その様子からして、警察に通報したんだね」

賀代は素直に頷く。手足の末端に全く力が入らない。それでも懸命に110番したのだ。これだけはやらねばと思った。

肌に突き刺さる沈黙が続いた。

ふいに、賀代の横にあつた血みどろの包丁を涼が掴んだ。

「何するのっ？」

沸き上がる恐怖を抑えて声を絞り出した。

涼は面白そうに賀代の顎を包丁の切っ先で上向かす。

紅い唇より零れ落ちる言葉達に、賀代は酸欠状態を起こした。頭が混乱する。

何故、涼がそんなことを言うのかが彼女には理解出来なかった。

「何で？」

賀代の視界がぼやける。必死にこらえていた涙が激流の如く溢れ出した。

一つ年下の少年は、刃物を振り上げ、思いきり賀代目掛けて振り下ろした。

「賀代が好きだから」

刹那の笑みは、大いなる悲壮感を含んでいた。

里岡賀代は、嗚咽を抑えきれずに口許を手で覆った。包帯で巻かれた両腕や胸部、足が痛む。何より、心が悲痛な叫びを上げている。あれから意識を失った賀代は、病院へ搬送されて手当を受けた。

傷は思ったより浅かったらしく、命に別状はなかった。気を失っていたのは軽い脳震盪のうしんとうを起こしたせいらしい。

父と母、妹は賀代が目を覚ますとベッド脇で泣き崩れた。彼らは病院からの知らせに飛んできてくれたらしい。週末から降り続けている雨の中、走ってきたのだろ。父の顔や、背広の前部分はずぶ濡れだった。

「涼ちゃん？ 涼ちゃんは？」

大切な幼なじみ。産まれてからずっと一緒だった彼が今、どこにいるか賀代には大方見当がついていたけれど、訊かずにはいられなかった。

「警察に事情を聴かれてる」

わかっていた父の答えにまた、大粒の涙が零れてくる。

母は優しく賀代の頭を撫でた。

「いいから、少し眠りなさい」

そう言われて賀代は無理矢理瞳を閉じる。瞼の裏に映るのは、常に憂鬱げな孫田涼の蒼白い綺麗な顔だった。

時間が来たので、孫田涼を牢に連れて帰らなければならないと、

二人の警官がやって来た。涼は大人しく席を立つ。

「……………本当に、君が殺したのかね」

疑問が刑事の口をつく。

途端に孫田涼の顔が硬化した。吊り上がった瞳に闇を湛え、薄い唇の端を軽く上げて彼は頷く。

「自供したんだから、何回も聞かなくてもいいんじゃないですか。ボクにはあの人を殺す動機があるし」

そう。現場の状況からしても、犯人は孫田涼に違いなかった。警

官達が駆けつけた時、彼は無言で死んでいる義母に包丁を突き刺し続けていたのだから。

だが、刑事はどうしても異様感を拭えなかった。

「刑事さん」

落ち着いた声色で少年はこちらを呼びかけた。顔をやれば、ニヒルな笑顔を見せる。

「警察が使う手錠よりも強固に人を縛ることが出来る方法を、ボクはあの時悟った」

一体何を意図して、小さな殺人犯が語ったのか、刑事にはわからなかった。

「迫る恐怖を目前にした約束は、人を容易く縛ることの出来る唯一の方法なんですよ」

歌うように告げて彼は足取り軽く取調室を退室した。慌てた様子で彼を迎えに来た警官二人も続く。

多量の汗をタオルで拭いつつ、刑事は雨が降り頻る窓の外を、ブラインド越しに睨んだ。

力なく膝を折っている賀代と義母を見た瞬間、状況は把握出来た。涼の幼なじみである里岡賀代は、恐怖によって歯が力チ力チ鳴らしている。涼は彼女の携帯電話が近くに落ちているのを確認し、警察に通報したかを彼女に訊いた。案の定、通報したらしいことがわかると、すぐに頭を回転させて取るべき措置を考えた。

凶器に使ったと思われる包丁の柄を義母のシャツの襟ぐりで拭い、賀代の指紋を掻き消す。そしてそれを自分が握った。

「何するのっ？」

囁くような声で、賀代は尋ねた。彼女に、涼はこれからの流れを

説明する。

「これはボクが殺したことにするから」

息を呑む音がした。ショックが大きすぎるらしく、賀代は喋らない。なので、言葉を続けた。

「賀代のせいじゃない。これはボクと母さんの問題なんだ。だから、賀代は悪くない。いいかい、これからキミを切りつける。賀代が犯人と疑われないようにするためだ。……母さんの返り血は浴びてないようだけど、万が一、警察に鑑定の結果返り血を浴びていると言われたら、よく覚えていないと言い張って」

賀代は肯定も否定もせず、ぼんやりと涼の義母を凝視している。

「私が、殺しちゃった」

「違う」

「私が、私が……」

「違うっ」

「この人、涼ちゃんにいつも酷いことばかりしてたから……やめてほしいって言いに来たの。そしたら、『何で他人様に命令されなきゃならないの？』って嗤<sup>わら</sup>って……」

「賀代」

儚げな少女の肩を揺さぶる。日に焼けた茶色い髪が揺れる。彼女の目がようやく涼へ焦点を合わせる。

「一つだけ約束して。ボクが戻ってきたら——」

一生言うことはないと言っていた誓いの言葉を呟いた。すると、  
「何で？」

と賀代の目に涙が滲んだ。

涼は、刃物を振り上げ、思いきり賀代目掛けて振り下ろした。

「賀代が好きだから」

泣きそうなのを堪えて、彼女の腕を挟み、額を掴んで力一杯壁へ頭を打ち付けた。

賀代。キミの瞳孔が縮まるのを見てボクは確信した。

キミはボクとの約束を守るだろう、と。

好きだ、好きだ、好きだ。

小さな頃から賀代だけが心の拠り所だった。あの女を父さんが連れて来た時から、全ての歯車は狂ってしまった、それでも賀代を好きな気持ちは消えなかった。

純粹な想いは次第に歪んできて、近頃はキミが他の人と笑い合うのを見るのだって辛かったけれど、あの時、あの女を殺したキミを見て心躍った。

少なくとも、賀代がボクを気にかけていてくれたのが嬉しかったんだ。

震えるキミを前にして、笑顔になりそうなのを必死で堪えた。

ボクは賀代のためならば、何だって出来ると思った。

擦れて行く思考は自己を崩壊し、狂気がボクを支配する。

——帰ってきたら、ボクと結婚して。

賀代。キミと一緒にいられるならば、どんな手段だって使おう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1964k/>

---

エンゲージ

2010年10月21日20時41分発行